

令和5年度 第一回 能楽入門講座

質問・回答一覧

5月6日(土)に開催された「第一回 能楽入門講座」では、受講者の皆さまから講師への質問を募集し、時間内にいくつかの質問に対して講師のお二人に回答いただきました。今回、残念ながら時間内に回答しきれなかった質問にも講師のお二人にお答えいただき、一覧にしてまとめましたので、ぜひご覧ください。

講座内で回答済みの質問

Q1 能楽初心者が能や狂言を楽しむためにはどうすればいいですか？

A:(渡邊師)演目があらかじめわかっている場合は、ネットであらすじを調べてから観るといいと思います。あらすじが頭に入っていた方が内容がわかって楽しめます。また、番組を見て人数が多い演目は大体観ていて面白いです。能は基本的に省略する芸能なので、シテ1人ワキ1人という演目が多いですが、それは上級者向きかな、と思います。大勢出ている演目の方が、それぞれの役がいろんなことをするので、ストーリーも追いやすいです。鬼が出てくる曲も大体面白いです。また、「観能の夕べ」は手軽に能一番、狂言一番を観ることができるので、そういった公演を選んでも良いと思います。

(能村師)最初はわからなくても良いです。私自身もわからない曲がたくさんあります。ただ、わからないからといっても、ストーリー全体がわからなくても、とりあえずあらすじがなんとなくわかっていれば良いし、シテの装束が綺麗だなとか、演者の足捌きが気持ちいいなとか、いろんな着眼点があるから、いろんな見方をして楽しんでいくうちに、少しずつ興味を持っていただいて、そこから演者がどんなことをやっているのかなど、理解を深めていただければいいと思います。

Q2 装束はクリーニングできますか？新しく装束を作る際の費用はどうしているのでしょうか？

A:(渡邊師)装束は洗えません。宗家が所蔵する装束の中には、室町時代や江戸時代から伝わる貴重なものが残っています。このような先人たちの汗が染み込んだものを

身にまとうことで、私たちも身が入る思いがします。唐織は大変高価なもので、昔のものは特に質が良く、今同じものを作ろうとすると値段が付かなくなってしまうのですが、なるべくそれに近いものを作ろうと装束屋も努力しています。唐織を今新調しようとする200万円ほどになります。ただし、これでも能楽師割引がきいていて、互いに支え合う関係であるので、値段は装束屋と能楽師が相談しながら決めることが多いです。(能村師)面にしても装束にしても、使っていないと逆に傷むし、長持ちしません。特に面は息をかけていないと、塗装などがひび割れることもあります。

Q3 アシライアイの演目にはどのような曲がありますか？

A: 「黒塚」^{くろづか}「道成寺」^{どうじょうじ}「鉄輪」^{かなわ}など恨みを持った女性が出てくる曲、現在物(幽霊ではなく登場人物が生きた人間の曲)で「安宅」^{あたか}や、「放下僧」^{ほうかそう}「望月」^{もちづき}のような仇討物などがあります。普通の間狂言は、前半が終わってシテが中入りした後、ワキと会話をする事が多く、その間にシテが装束をかえます。アシライ物の時は、シテ方やワキ方がやらないような事を狂言方がやるといったようなものが多いです。

Q4 加賀藩以外に同様に能に力を入れた藩はありますか？

A:あります。宝生流でいうと、会津藩(会津宝生)などです。

Q5 金沢出身の能楽師はたくさんいますね。狂言でも野村万蔵家は先祖を辿ると加賀との繋がりががあると聞いたことがあるのですが…

A:(能村師)野村万蔵家はもともと金沢の出で、3世まで金沢、4世からは東京に出て、現在も東京を中心に活動しています。今の万蔵は9世です。

Q6 忘れられない舞台はありますか？

A:(渡邊師)宝生流には現在180曲ほどありますが、その中でも「披^{ひら}キ物」というものがあり、能楽師が若いうちに経験する登竜門のような演目があります。「石橋」^{しやつきょう}「道成寺」^{みだれ}「乱」^{しょうじょう}(「猩々」の小書き(特別演出)つきのもの)の順番に経験します。最初にやった「石橋」をはじめに経験した時は嬉しかったし、今までにないくらい一生懸命に稽古した思い出があります。先輩方も必ず通ってきている道なので、その時の先輩方の目が非常に厳しいというか…「自分の時にはこうだった」というのをいろんな人からたくさん聞かされたことも思い出の一つになっています。

(能村師)忘れられない舞台は数々あります。間狂言は大変難しく、一曲の物語をずっ

と謡わなければならない、短いものもあれば長いものもあって、居語いがたりと言って座って語るものや立ったまま5分以上ずっと喋るものなどさまざまあります。そんな間狂言の台詞を絶句してしまったことがあって…「春日龍神かすがりゅうじん」の間狂言だったのですが、今でも能で「春日龍神」が出ると思い出してしまいます。自らの恥と戒めの意味で忘れられない舞台です。

＜補足＞間狂言を知っているシテ方はほとんどいません。間狂言で止まった場合、本来なら偉い先生が助けに入るべきですが、放置プレイが多いそう。渡邊師は過去に間狂言が止まってしまった舞台上、橋掛りの方から「どこで止まった？」と上の先生が助け舟を出している場面に遭遇したこともあるそうです。

未回答質問の回答

Q.以前、能村先生の「仁王」を観た際、瞬きをしていなくて驚きました。何分ほど瞬きをせずにいられますか？特別な練習があるのですか？

A: (能村師)におう仁王に扮している演技をしているので、瞬きをしないように心がけていますが、特に練習をしているわけでもなく、何分できるかはわかりません。

(渡邊師)ワキ方の故宝生閑先生や狂言方の山本東次郎先生が演能中一切瞬きをしていない事に驚いたことがあります。真似してみようと思いましたが涙が出て来て出来ませんでした。空調などの環境にもよりますが、仕舞を一番舞う間ぐらいは平気です。気合いです。

Q.公演のない日は何をしていますか？普段はどれぐらい練習をするのでしょうか？専業で能楽師なのでしょうか？

A: 公演のない日は、稽古をしたり、公演のための準備をしたり、完全にお休みにしたりと、時間を自由に使っています。練習時間は、自分・玄人・素人と、稽古する対象によって異なりますが、自分や玄人の場合は1時間～2時間ほど、素人の場合は30分～1時間ほどです。

専業でやっている人も、兼業でやっている人もいます。

Q.能楽師は儲かるのですか？

A: (能村師)儲かりません。

(渡邊師)現代の能楽を専業とされている能楽師の殆どは謡や仕舞、お囃子などを趣味で習う素人のお弟子さんをとって生計を立てています。お弟子さんを沢山とれば儲かるという事になりますが、現状習う方も減少傾向にあります。

このような理由もあり、三役(ワキ方、狂言方、囃子方)の能楽師には兼業の方が多いです。

Q.修行期間はどれくらいですか？

A:(能村師)約5年です。

(渡邊師)役職、流儀によって違いはあると思います。シテ方宝生流では宗家の下で5年~10年位、内弟子修行を経てから独立します。独立してからも稽古は受け続けますので、ある意味生涯修行とも言えます。

Q.違う流派で共演することはありますか？

A:(能村師)あります。

(渡邊師)シテ方に関して。一日の催しで複数の流儀が演能をする事は良くあります。ひとつの演目に違う流儀(シテ方)が混在する事は、殆どありません。特別な企画の催しで行う事は稀ですがあります。

Q.能と狂言両方やる人はいますか？

A:基本的にシテ方・ワキ方・囃子方・狂言方というように専業になっているので、違う役をやることはありません。

Q.江戸時代には髷を結った状態で演じていたのでしょうか？

A:(能村師)髷まげを結って演じていました。

(渡邊師)直面ひためんの時に被る烏帽子などは髷まげがある事が前提の作りになっています。現代の髪型で被ると落ちやすいので、補助の紐を付け足して被っています。

Q.後見役はある程度経験を積んだ方がされるのですか？

A:後見という役は、舞台の補助的なことはもちろんですが、万が一舞台上で何かあったときに対応することも求められますので、経験を積んだ人でないと成り立ちません。

Q.能楽の摺足が健康に良いと言われていますが、どのようなところが身体に良いのでしょうか？また演じていて「ここが鍛えられているな」と感じる場所はありますか？

A:(能村師)構えといわれる姿勢を維持したまま摺足^{すりあし}で歩きます。構えとは、腰を入れて背筋を伸ばし重心を少し前にして立っている状態です。この状態を維持したまま歩きますので、一番は体幹が鍛えられると思います。

(渡邊師)酔っても摺足で真っ直ぐ歩く事が出来ます(笑)

Q.能や狂言は元々野外で演じられていたのでしょうか？

A:(能村師)元々は半野外で、神社仏閣で演じられていたものが能舞台という能専用の舞台に変わり、それが屋内に入って能楽堂となりました。また、今でもありますが薪能という形で野外にて演じることもあります。

(渡邊師)古くは勧進能^{かんじん}(寄付金集め公演)の度、仮設舞台を野外に作っていたそうです。城内にあった能舞台は現在の見所^{けんしょ}に当たる部分が野天(舞台自体も野外)で町人などはそこで見物し、その周りに武士や上流階級の人たち専用の別棟の見所があるのが一般的でした。現在の様に劇場型になったのは明治14(1881)年に芝公園に建てられた能楽会能舞台(芝能楽堂(現存せず)・能舞台は後に靖国神社へ移築奉納)が最初です。

Q.いまは舞台を見やすいような位置で座って楽しんでいます、昔の方々はどのようにご覧になっていたのでしょうか？

A:上記回答と重複しますが、元々半野外でしたので、観客は地面に座って観ていたと思います。より快適に鑑賞していただけるように能楽堂という能楽専用ホールができたと考えていただければ良いと思います。

Q.囃子方の演奏はどれくらい決まっているのですか？きっちり楽譜がある？梓だけ決めてアドリブ？

A:(能村師)囃子のことは囃子方の方に聞かないと答えられませんが…寸法はおおよそ決まっていると思いますが、その時々によって変わると思います。笛には唱歌^{しょうが}・大鼓・小鼓・太鼓には手組^{てぐみ}と言われる物が楽譜に当たります。

(渡邊師)謡や笛の旋律には、拍子(リズム)をとっている「拍子合い」という箇所と、拍子を取らず演奏する「拍子合わず」という箇所があります。「拍子合い」は手組がしっかりと決まって演奏しています。「拍子合わず」はお囃子が謡や笛の具合を聞きながら手組

みを調整しながら演奏しています。拍子合いでも、その時の舞台の雰囲気の手組みを突然変える(謡に合わせてくる)お囃子方もいらっしゃいます。

Q.能舞台の下に音響効果のために甕を敷き並べていますが、音の効果はどのようになっていますか？

A:足拍子を踏む際、音がしっかり響くように、舞台の床下に甕かめを敷き並べたり、空洞にしたりしています。また鏡板や屋根があるのも音が反響するためにあります。

Q.宝生流と加賀宝生はどこがどう違いますか？演じるときに演じ方を変えますか？

A:(能村師)違いはないと思います。

(渡邊師)同じです。

以前は中央と地方の行き来が少なかったので「加賀宝生」を田舎芸と揶揄する意味合いもややありましたが、今や中央にも何ら引けを取りません。演じ方は変えてはいませんが、この地で演ずる事で加賀の風土や人間性などが自然と醸し出せていれば良いなと思います。